
ヤカタの

水城みゆか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤカタの

【Nコード】

N4484I

【作者名】

水城みゆか

【あらすじ】

高校二年の夏。淡い恋心から気になる男子を誘ってちょっとした旅行……のつもりが――。

漂流先の館に次々と招かれてくる人々、そこで起こる数々の怪奇は誰の手によるものなのか……？

ヤカタの眼へと続く、呪いの始まりを書く。

ヤカタの（前書き）

この作品には暴力的シーンやグロテスクな表現を含みます。
苦手な方は閲覧をご遠慮下さい。

ヤカタの

一樹^{いつき}は叫んだ。

「玲奈^{れいな}——！」

吹き荒れる豪雨の中、海岸にけたたましく打ち付けられる暴虐がざばんざばんと警鐘を鳴らす。

「もう無理だよ一樹……帰ろうよ」

辺りは暗い。電灯に照らされる靴は泥だらけだった。

一樹の隣を歩く木村^{きむら} 朱美^{あけみ}は合羽の下で前髪を濡らし、小さな肩を抱きながら必死に一樹を追っている。時折ぬかるみに足を取られる度、自分一人でも引き返そうという思いが強くなる。

それでも朱美は引き返さない。ここにいないもう一人を裏切らないために朱美の心がそれを拒否していた。だから、口だけが抑えきれない感情を零し続けるのだ。

——ザアザア。

「……一樹」

朱美はもう一樹を静止しようとは思わなくなっていた。

途方もない疲労感と倦怠感が雨に打たれるごとに増していく。

「……」

徐々に一樹の希望が潰えるのを待つだけだと、朱美は残酷な自身にぞっとしたときだった。

「——光だ！」

一樹の声に朱美がはっと前を向く。

一縷の光が二人の前に見えた。それは、紛れもなく彼女のものだ。朱美はほっとすると同時に少し落ち込んだ。自分が玲奈だったらどれほど今の状況が嬉しいものであったかは想像に難くない。

「玲奈！」

一樹が駆け寄ったのをみて、朱美が息を呑む。玲奈は衰弱し、朦朧とした意識の中でペンライトを降り続けていたようだった。

「……酷い熱だ。早く戻らないと——」
何の躊躇もなく、一樹は玲奈の身体を自分の合羽の中へ引き入れた。

「……………」

朱美は薄汚れた感情が沸いてくるのを噛み殺す。

「早く戻ろう、私が照らすから」

——ザアザア……。

三人を打ちならすように豪雨は酷く続いた。

暖かい光、屋形^{やかた}の尖塔が見えてきた。自然と気持ちも弛む。

「はぁ——はぁ——」

一樹の体力も限界に近づいていた。

そして玲奈の濡れた身体は、確実に一樹から体力と体温を奪っていく。

「大丈夫——？ 一樹」

朱美は一樹の足元を照らしながら後ろ歩いていたが、明らかにペースが落ちていることに気づいていた。

「——はぁ、——はぁ」

一樹の呼吸もはつきりと朱美に聞こえる。一樹は体育系の体つきではないにせよ、普通の男子よりは体力がある。

しかし、この豪雨の寒さが相まって一樹の限界は早まったと容易に推測できた。

「もうちょっとだから、頑張って」

自分にできることは何もない。朱美は唇を噛みながらただライトの焦点を見ていた。

建物は徐々にその片鱗を露わにしていき、大きさもかなりのものであることを伺わせる。

暗がりでは外壁はわずかなレンガしかわからないが、高級な造りであることは疑いようがない。

「着いたよ。一樹」

扉を叩くと、中から重くゆっくりと開かれた。暖かい空気がふわっと二人に吹きつけられる。

「あーちゃん！ 一樹君！ れーなちゃんは？」

シヨートの髪をなびかせながら駆け寄ってきたのは柊^{ひいらぎ} 未華^{みか}だった。玲奈を見るなり、あたふたと二人をタオルで拭き始める。

「一樹、無事か！」

もう一人の男の方、竹城^{たけしろ こうき}浩紀は、蒼白な一樹を見て慌てた。

「ふらふらじゃないか、バカ野郎……！ 玲奈を降ろして二人とも暖炉のそばに早く移そう。未華、お湯は沸いてるな？」

「うん、おっけーだよ」

二人は別々に交互に運ばれ、暖炉の中央を簡単なカーテンで仕切られたところへ居座った。

「一樹、悪いがお前の介抱は俺だ」

「……別に文句なんか言わねーよ。それより悪いな、勝手に一人で行くって言っちゃまって」

「別に気にするな。お前の判断は正しかった」

もし二人で共倒れになっていたら、それこそこのメンバーの女性陣に多大な迷惑を掛けることになる。

「おい、玲奈はどうなってる？」

「何、見たいの？」

「ちがー、大丈夫なのかって意味だっ」

笑い声がする。大したことはなさそうだ。一樹と浩紀は顔を見合わせてほっと溜め息を吐いた。

しばらくして、女性陣の方から玲奈を寝室まで運んでくれとカーテン越しに頼まれた。

「後は自分でやれよ。俺は役得仕事してくる」

浩紀はそのまま立ち去ってしまう。着替えの用意がないところ辺り、男のがさつさだ。

どうしたものかと思っていると、未華が入り口からやってきた。

「ん、一樹君なんですっぽんぽんの？ 服は？」

「あはは……忘れられたみたいだ」

正直に告白するが、カーテンの向こうで後片付けをしていた朱美は過剰に反応した。

「ちょっと、何か着なさいよ。どうやって部屋まで戻るつもり？」

「待ってて、何か取ってくるから」

未華が退室すると部屋は暖炉の音と窓辺に打ち付けられる雨音とで支配される。

「一樹……」

突然カーテンの向こうから朱美の頼りない声が聞こえてくる。

「どうした」

「ごめん、取りに行くの私だったよね」

「？」

一樹は意味がわからないまま、聞き返そうとしてやめた。

「別にいいよ」

一樹はただ単に玲奈を担いでこれなかったことを申し訳なく思っているのだらうと解釈していた。

実際は素直に切り返した未華を羨ましく思うのと同時に、玲奈の後始末に対する屈辱感とが平行してわき起こったために出た朱美の台詞だった。

「意味わかんない……」

朱美は誰にも聞こえないような小さな声でそう確かに呟いた。

もう自分でもわからない。何をどうしたいのか。何故こんな場所で延々と時間を浪費しているのかが。

「明日には帰れば……」

一樹がそう言った。

そうだ、帰らないと。でも何処に？ そう思った時、ふと何かに見られたような気がした。

帰るのなら***はないぞと。

…続

——三日前……。

高校二年の夏休みに入って修学旅行とは別に旅行がしたいと言いつ出したのは未華だった。

初めは朱美と二人で話しが進んでいたのだが、不意に朱美がこんなことを言い出した。

「……ねえ、一樹たちも誘わない？」

たちはな橘一樹は竹城浩紀とよく連んでいる二人組だ。

二人とは中学の頃からのちよつとした仲である。顔を少し染めていう朱美はどこかいじらしい。

いつもは遊びの雰囲気か漂うが、今回は真剣なのかなと未華は思った。

「いいよ、用心棒になってもらおう」

一樹だけでは怪しまれるので、浩紀も誘う。

二人は突然の計画に快諾してくれたものの、遊ぶことしか眼中にないようで二人は溜め息をついたのをよく覚えている。

次の日、駅で待ち合わせをしていた女性陣二人は10分前に到着する。

「まだ来てないの？」

「そうみたい」

未華はきちんと連絡を入れたと弁解したものの、朱美はどこか不安気に時計を何度も確認していた。

「——悪い、遅れた」

そういつて現れたのは女たちの鞆を二つ合わせたかのような大きなボストンバックを担ぐ浩紀と、それとは真逆な手提げバックを持つ一樹である。

時間は丁度予定していた時刻になっていた。

未華は片手を上げて一樹たちを急かす。

「急ごう、電車に乗り遅れちゃう」

四人は挨拶もままならないまま、改札口へ急いだ。

浩紀のバッグがあまりにも大きい為、走る度に周りの人へぶつか
る。

「す、すいませんっ」

一行の速度は自然と浩紀に合わせたものとなる。

ブリッジを越えて、車内へ駆け込む。

浩紀が途中でその鞆をドアの入り口へ詰まらせた。

「うおっ」

「おい、何やってんだ！」

一樹は咄嗟の行動で鞆を押し戻すと、鞆ごと浩紀の体が流れ込む。
ぷしゅうつと空気の抜ける音がした。入り口は壁となって塞がる。

「はぁ、ギリギリじゃない」

朱美の顔がわずかに綻んだ。

未華は笑っていた。

一樹や浩紀もつられて笑う。

中学の頃からこのメンバーは何も変わっていない。

男と女でここまで仲がいいのもそうないだろうと自負できる。

朝一ということもあってか、乗客はまばらにしかいなかった。

「な、なあ。どれくらい滞在するつもりなんだ……？」

一樹は恐る恐る聞いた。

滞在日数は秘密となっていたからだ。

もしかしたら、持ち合わせでは全然足りないかもしれない。

「3泊4日の旅行だよ。大丈夫、足りない分は私かみんなですて替
えてあげるから」

ね、と未華がみんなに目配せする。

朱美も浩紀も異論はないようだった。

「な、なんだよ。浩紀まで……」

そう、この旅は予め計画されていた。

朱美と一樹が恋仲になるのが目的なのだ。

ここまで言われては、一樹も途中で帰るとは言えなくなってしまう。

「はぁ……」

電車は真夏の太陽の下を駆けていた。

九州のB市港。フェリーに乗る直前にそれは起こった。

同級生の工藤玲奈の姿があったのだ。

その身なりはまさにこれから同じ船に乗ろうというところで、誰も予想していなかった偶然に男二人は予想以上に喜んだ。

「おい、すっげー偶然だな！」

「……う、うん？」

玲奈はその華奢な体を振り返らせて吃驚する。

「――竹城君？」

一樹もまた、見知らぬ場所で見知った顔を見たことに心が和む。

「俺らもいるぞ」

一樹は浩紀の後ろで合図する。

朱美と未華はあまり喜んではないようだったが、浩紀はその歓喜を余すところ無く表現していた。

「もしかして、このフェリーに乗ってるってことはぁ、工藤も沖縄か？」

「……そう」

玲奈は少し変わった雰囲気の子であった。

基本的に人の質問には何でも答える。

何でも答えるというのは、例えば今のような会話ではない。

クラスの中では女子禁制、男子だけの会話にも平気で交じったり、浮き足立つような会話でも玲奈は平気で受け答える。

誰かがわからなくて困っていることは次の日に調べて教えてくる

ような、良く言えばお節介な人で、悪く言えば変人であった。

憶測で答えることもたまにあるが、そのときは最初に「憶測だけ」とつける。

女子には答えられないような質問も、玲奈ならまじめに答えてくれるということから男子の信頼も興味も厚い。成績も優秀、知識も豊富なだけにちよつとした姉貴分に捉えている男子もいるほどだ。

しかし、そんな包み隠さない玲奈は敵も多かった。

「やっぱ、お前面白いな」

彼女は切りそろえた前髪の下から聡明そうな眼をのぞかせていた。長い髪は艶やかに肩へ流れており、表情は何一つ変わっていない。もともと、表情は少ないのだ。

一樹はそんな玲奈のある種の禍々しい雰囲気飲まれそうになりながら聞いた。

「玲奈は何しに来たんだ？ 遊び？」

玲奈は少し言葉を選んでから

「遊び」とだけ答えた。

女性陣の二人はこのやりとりを黙って見守っていたが、さすがに男子の反応の良さが気に障ったらしい。

「じゃあ、私たち急いでるから」

まるで一樹たちを急かすように目配せした後、朱美は先に行く。

朱美はそのままショートのを揺らして、ずんずんと歩いていく。

「あはは……、ごめんね」

未華は一樹たちにそう言うと、朱美を追って去っていった。

「なんだ、あいつらあ」

浩紀は不思議そうに頭を搔く。そう、工藤玲奈は総じて女子に受けが悪かった。

決して取り繕わないところが男子に人気であるだけに、女子の妬みは計り知れないものがあるのだ。

またそれを露と知らない男子たちは玲奈を擁護し、結果として女

子達から更なる恨みを買っていく悪循環。

朱美のように態度で不快を表すのはまだ良い方なのだ。

「でも本当に偶然だよな。俺たちもこれから沖縄に行くんだけど――」

「玲奈でいい」

誰とでもフレンドリーなのは知っていたが、いざ話してみると一樹たちは玲奈の壁をつくらない態度に好感を覚えていた。

「玲奈は沖縄のどこに用事？」

「沖縄へは叔母の用事で行くことになってるから、多分一樹たちとは違うところだと思う……」

つまり、そんな所用を言いつけられた玲奈はたまたま一樹たちと会っただけなのだ。

「うーん……」

「一樹、お前まさか」

「せめて、フェリーの中にいる間だけでも一緒に行動しようかって誘おうとしてるんだ」

「おい、本気か？ 朱美たちに何言われるか――」

恐怖にすぐむ浩紀の言葉を遮り、一樹は玲奈へと向いた。

「玲奈さえ良ければ一緒に、どうだ？」

旅は道連れにすると面白い。こんなサプライズがあっても悪くはないだろう。一樹はそんな考えで玲奈を誘った。

「いいの？」

「ああ、玲奈さえよければな」

玲奈の顔に少し笑みが浮かんだ。

やはり玲奈も一人は嫌だったのだ。

外見は十二分に可愛い玲奈が加わることに浩紀はこれといって強い反論もないようだった。

何しろ、工藤玲奈の笑みを見たことで浩紀は啞然としていた。

玲奈はジーンズのポケットから携帯を取り出すと、なにやら話し

込んだ。

「一樹たち、まだこんなところにいたの？」

しびれを切らした朱美が戻ってくる。一樹は玲奈のことを話すと、朱美は眉をつり上げた。

未華は何とか朱美をなだめすかしながらも、耳打ちをしてからようやく不承不承と承諾する。

――それから斯くして、五人はフェリーへと搭乗した。

この夏休みの時期に玲奈のような飛び入りの者が、搭乗出来たのは運が良かった。

家族連れや年配者の人々なども多くおり、ともかくあてがわれた部屋に行くまでは大変な混雑だった。

フェリーの外観は一見すると普通の船にも見えるのだが、やはり貨物専用というのか、緑色のリノリウムが潮くさい匂いを放つ簡素な造りが目立った。

これが初めてというわけでもなかったが、一樹と浩紀は大きな乗り物に子供の勝りに興奮する。

「どうして男ってこうなのかしら」

女性陣三人は特に男二人を淡々と眺めていた。

ホールへ向かうと、一角には売店などがあり、そこには海を一望できる窓や昼食を取れる食堂などが隣接している。

「こう広いとミステリーとか期待するよな」

「馬鹿言わないでよ、そんなの嫌」

「飛行機の窮屈さとは比較にならないのは確かだ」

一樹の質問に朱美が飽きもせず答える。しかし、反対に浩紀の言うことにはほとんど無視だった。

浩紀もいよいよ朱美の態度がおかしいことに気がつき始めたようで、未華をそっと物陰に呼び寄せた。

「なあ、いくらなんでもあからさますぎないか……」

唇に人差し指を添えて、未華は「黙って」と言ったが、浩紀も馬

鹿ではない。

「あんまりしつこかったら未華から言ってやれよ？」

「わかった」という未華を置いて、浩紀はそつと一樹のそばにいた玲奈を連れて二人で部屋へ戻ろうと提案した。

そして部屋へ着くなり、浩紀は愕然とした。

まさかの同室。

いや、先の話を聞いていればよもやと疑いはしたが、朱美は本気で一樹と近づきたいようだった。

「これはギャグか？」

「ギャグっぽい……」

玲奈は淡々としている。

浩紀は布団の数が四つあることを確認して小学生のお泊まり会を思いだした。

「ただいまあ、良い感じだったから帰ってきちゃった」

入り口からくる未華に浩紀は必死の様子で詰め寄る。

「未華、これはギャグなのか？」

計画が話された後から電話で協力して欲しいと言われてそのつもりだった浩紀だったが、元締めである未華にこればかりは異議を申し立てたい心地だった。

未華は普段と違う切り返しでごまかすも、それがギャグではないことは明白だ。

「玲奈はどう思う？」

「部屋が別で助かった」

表情が変わらないから怖い。いや、むしろその主観的な感想はどうかと浩紀は思うのだった。

「ごめんね。もうわかってると思うけど、私たちがこの旅行に行く理由って一樹と朱美をくつつけるためなんだ」

「ん」

わかっているのか、いないのか。

いや、そもそも前提がおかしいことに気づけ、と浩紀は自分を戒

めた。

「はめ……いや、別室にはならないのか。いくらなんでもお互いいろいろ問題あるだろ。俺たちもう高校生だぜ？」

言いながら浩紀は意識を部屋にそらす。

部屋の床は玄関から一段高くなっており、一面に絨毯が敷かれている。

その一辺に出番を待つ四つの布団が綺麗に積まれていた。

窓からは相変わらず海が見える。

「まだ、でしょ？」

やはり問題だらけの状況に変わりはないかった。未華はどこか飛んだところがあるから現実主義な朱美とセットで丁度いいのだ。

「まあ、私だって本音を言えば、正直こんなのどうかと思うよ。けどさ、それは何も起きなければ問題のない話しなんだって」

そうして若干理知的なところがある。

それは目的のためなら手段を選ばないかのような危うさでもあった。

結わいた髪は童顔な顔と相まってどこかあどけなさが残る未華。

しかし、その心の中はときどき浩紀にも伺い知れぬ妙な不安を募らせるのだ。

一樹と朱美は散々歩き回ってようやく帰ってきた。

夕食はどうするのかと聞くと、もう済ませてきたと言う。

浩紀は呆れながらも、一樹がまんざらでないことを悟って少し寂しい気分になる。

「それじゃ、俺たちも食ってくるよ」

親友として浩紀の心には複雑なわだかまりがあったものの、一樹は笑って見送ってきたのでとりあえず調子を合わせる。

「突然友達がいなくなったみたいで寂しい？」

未華が突拍子もなく廊下で言った。

「は？　なにが」

浩紀は言葉の意味するところを考える前に答えてしまう。

これでは気にしていると言っているようなものだった。

「えへへ、浩紀ちゃん可愛い」

顔が赤くなりそうだったが、必死に冷静さを保つ。

今ここで舐められたら生涯ずっと手玉に取られそうな気がした。

「なんだよ、うるさいな」

「あれ、もしかして怒っちゃった？ ごめんね」

玲奈はこのやりとりを横で無言のままやり過ごしていた。

一樹から誘ったくせに、玲奈のことはほったらかし。

浩紀はある種の使命感を持って玲奈に話題を振った。

「玲奈は、好きな子とかいないの？」

「……子？ レズの線で？」

「ごめん、人——」

女子にそんなことを聞いたことがない浩紀はつい男子に聞くようなノリで言ってしまった。

咄嗟に訂正はしたものの傷がえぐれた心地だった。

「……」

浩紀は咄嗟に未華からの一撃。浩紀ちゃんひどくい、くらいは覚悟していたのだが、未華の口は塞がれたままだった。

「……そういうのは、まだいない……と思う」

「思う？」

自分のことなのに、「思う」。浩紀には理解し難い持って回った言い方だった。

詳しく聞き返す前に食堂への入り口が見えてしまう。

食堂に入ると、食券販売機に列が出来ている。

どうにもレトロな空気が漂うまさに食堂だった。

「俺は……うどんでもいいや」

未華はサンドイッチで、玲奈は冷やしラーメンだった。

白い長テーブルに三人がぼつりと座る。

どうやら最初に見た列が、最後の団体だったらしく、後はちらほ

らと食べにくる客がほとんどだ。

食堂の窓から見える外もすっかり暗い。

「お待たせしましたあ」

軽装にエプロンをしただけのウェイトレスがトレイに食事を載せてやってきた。

いやはや、なんともシュールな光景である。

「こちら、うどんとサンドイッチと冷やしラーメンになりまあす」

今はやりの語尾伸ばしをしながら、若いのはテーブルにそれを置き去っていく。

「なんか、こう……雰囲気ってものが……ねえ」

言わんとすることはわかる。わかるが、浩紀はこんなものだろうと値段を見たときから覚悟していた。

うどんは何だか大して味がしない。

本当はカツカレーにしたかったのだが、売り切れていたのだ。

黙々と食べる三人。

浩紀の今の状態は両手に花であるにも関わらず、その重たい空気に押し花状態だった。

「ずずず……」

黄色いイカの足を出しながら玲奈が臆面もなく麺を啜っている。

浩紀も負けじと啜るしか、この場の空気をやり過ごす手段を思い浮かなかった。

結局、わずかな空腹を抱えたまま浩紀は食堂を後にする。

部屋へ戻ろうとしたところで未華が待ったをかけた。

「せっかくなんだから、二人きりにさせてあげましょうよ」

軽い調子でいかにも分かっているでしょという未華の口調は口だけが笑みを作っていた。

しかし、それでいいのだろうか。一樹は朱美のような女子が好みだっただろうか？

記憶を必死にたぐり寄せていく。一樹との付き合いなら浩紀の方

が長いのだ。

「ほらほら、行くよ」

浩紀は有無を言わされないまま腕を引かれていった。

しかし、玲奈はついてこない。

「どうしたの？ 玲奈ちゃん」

未華が少し強い口調で玲奈を促す。

玲奈は誰も居ない空間に何か恐ろしいものを見たような表情を一瞬見せた後で、黙って此方へ来た。

しばらくは無言で引いていた未華もその距離の長さに手を離し、そのまま歩いて行く。

浩紀は少し後方を歩く玲奈へ歩み寄って口を開いた。

「どうかした？ なんか都合が悪かったら遠慮なく言えよ」

普段は無口であるが、こういうところは気にかけたくなるのが玲奈の魅力ともいえる。

「なんでもない」

一瞬わずかに表情が変わったように見えたのは影による錯覚だったのかと、浩紀はそのまま未華の後ろを行った。

「ほら、ここ」

カーペットを延々と行った先には何やらちよつとしたゲームコーナーのようなところがあった。

何故、こんなものがフェリーに乗っているのかは、現代の若者には全く理解し難い。

しかも、中には見たこともないようなレトロなジャンルが立ち並んでいる。

クレイゲームやコインゲームはしっかりと地面に打ち付けられており、その安全さは理解できた。

「こんなところがあるなんてなあ」

でも何故か、妙な胸騒ぎがしてくる。

その原因を確かめたくて、浩紀は未華に寄った。

「なあ、やけに人気が無いと思わないか」

それは確信である。

ここは遊び場だ。暇を持て余した客人が一人くらいいたっていいだろう。

それが全くの皆無なのであるから事態はいよいよ謎を極める。

単にこのゲームコーナーに興味が沸かなかったただけなのかもしれないが……。

「そう言われれば……そう、かも……」

未華はとにかく二人を部屋へ戻らせまいと奔走していた為か、周りのことが見えていなかったらしい。

無人のゲームセンターは空しいBGMをひたすらに流し続けている。

不可解さはじめりとした不愉快さへと変わり、三人は押し黙った。

「妙だ……」

なぜか寒気が走る。

一体最後に乗客をみたのはいつだっただろうか。

客の中に例えば凶悪犯がいたとしても、誰かが騒ぎ立てるだろう。

それがこの静けさは何だろう。ざっと見ても千人はいた客人たちが忽然と姿を消したかのようだった。

「まだ、気のせいかも知れない」

この広いフェリーだ。何かの催しものがあって、皆そこに集まっているだけかもしれない。

「一旦戻ってみる？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4484i/>

ヤカタの

2010年10月21日21時38分発行